

文化財 やまと

大和村文化財保護協会発行



七鈴 五獣鏡

郡上は郷土芸能の大きなふきだまりである。私は考えている。全国的に見ても全く珍しい所である。

延年・田楽・風流・神楽・地芝居など多種多様なものが郡上谷には伝わっている。東山道・中山道に近く、そんなに深い山奥でもなく隠れ里にも似たところで、遊芸の者がいつとき足を留めるには実に恰好の場所である。これは郷土の人が芸能が好きで、それを習い覚えようとする物心両面のゆとりと器用であったこと、その

芸能を神祭りの中にとり入れたこと、信仰心も篤く、その神祭りが永く伝えられてきたのである。この地方はそれ程物質的に豊かではなかった。美濃平田部のような山車・屋台など余り金のかかるものが伝わっていない。大和村は昔の山田庄で郡内で最も開けた肥沃な土地である。ここを治めた東氏は大きな野心も持たず、歌道の名家として古い伝統を養ってきた家系で、文明年間宗祇に古今伝授をした東常縁を頂点とする。また五山文学者として聞こえた僧侶が五人も出ている。東氏の統治三三八年間、荒くれた鎌倉

武士の中にあつては特異な存在で全国的に見ても珍しいことだと思ふ。 芸能 能の大成者世阿弥はその風姿花伝に「色々な人が心を和らげ楽しみ、寿福を増してゆくもの、上下の区別なく云々」というのが芸能だとしている。一般的にいえば美を追求し、身をもってこれを表現しようとするのが芸能であり、そのうち郷土芸能には「祈り」の心がこめられているのが特色である。

郡上の祭り

岐阜県文化財保護審議会議長
岐阜大学名誉教授
日置弥三郎

日置弥三郎

る。民俗芸能・郷土芸能は招魂を基調としているといつてよい。 神楽 神を神座にお迎えして鎮魂の呪術を行なう神事が神楽であり、カミクラがなまけてカグラとなった。正月に予祝として五穀豊穰を願ひ、田植の時は祭りをして苗を植え、また厄神払いのお祭りをするなど郷土芸能として伝承されてきた。このように祭りは祈りから始まったものである。しかし山紫水明の郡上も開発が

進入で、だんだん昔の面影を失ないつつあり、労働力が老化し、若者の都会流出というような事、今では伝承もむずかしくなつたと聞く。全く悲しいことである。 七日祭り 明建神社は東氏が入部と共に、その守護神妙見大菩薩を勧請してきたものであるが、その祭礼記録としては元祿六年の祭礼執行の儀式書がもっとも古く、現在の七日祭りとほとんど変わらない祭りが行なわれたことを示しており(村史史料編一〇八四頁)また寛政九年の「当村氏神妙見大菩薩祭礼之覚には、参詣人六百人程、散銭九百六拾文云々」(同一〇八六頁)などの記録が残っていて当時としてはなかなかの賑いであつた様子がかがえる。

お祭りというのは参加することに意義があるのであつて、ただ飲み食うだけではお祭りとは言えない。いかに多くの人が祈りを持ち神を敬うかということであつて、このことは民俗学的に見て大きな関心事である。 かき踊り かき踊りは一種の風流踊りである。風流は古くはフリ

ユウと読まれ、物語や歌の心を技に形に表わすことであつた。それがだんだん優美に踊る踊りをさすようになった。

八幡町の寺田さんが美濃民俗に発表されているところによると「郡上の神楽は宝暦騒動以後に始つたのが多いが口神路の大神楽のように、それ以前からあつたものも四つくらいある」と言つてみえる。一〇〇戸にも満たない小村で、よくも今まで伝承されたものだと思ふ心させられる。

郡上踊り 郡上の盆踊りは寛永年間遠藤慶隆が土農工商の融和を図るために始めたといわれている。明治以後に西川流の手振りが入つて今のようになつたものと思われるが、青山氏が特に奨励したと言われるのは私には信じられない。青山氏は宝暦騒動直後に郡上に来た領主であるが宝暦騒動は百姓がせつばつまつて立ち上つた必死の一揆であつた。そうした百姓を上からの押しつけで易々と手なづけることが出来たであろうか。農民は一揆のときのすぐれた団結心、盆踊りを通じて心の団結を考えたものであろう。そこにも祈りの心を認めた。 (二頁下段へ)

素材からみた

仏像のあらまし

畑中浄園

1 仏像の初めは石仏

仏教においては初め仏像はなく釈迦涅槃の後は遺骨を生前のゆかりの地に埋めて塔を建てて供養した。その後紀元前後にガンダーラ地方でギリシアの神像彫刻の影響をうけて石仏が造られたのが仏像の起源である。ついで紀元四世紀頃に印度のデカン高原西斜面にアジャンター・エローラなどの石窟寺院が造られ、印度固有のグプタ様式といわれる石仏が多く造像された。この造像の様式は中国の敦煌千仏洞や雲崗の石窟寺院の造像に大きな影響を与えた。日本においては良質の石材に乏しいため、巨大な石像は見る事ができない。また、古代から中世にかけてもその数はきわめて少ない。近世になって仏教の庶民化・世俗化が進行するにつれて、道路の難所とか村の辻などに地藏や観音の小像が数多くたてられるようになった。これらの石像には石の片面に彫り出

した半肉彫りと、石全体を立体的に彫った立体彫りがある。

2 かなぶつ(金剛像)

仏教が中国に伝来したのは紀元前後といわれているが、その伝来説の中には金の仏像が經典と共に伝えられたといいい、日本へ仏教が公伝したときも百濟の聖王が銅像一軀と經典を献上したといわれている。このように金銅の仏像は早くから造られていたと思われる。とくに日本においては飛鳥奈良の時代に大小さまざまの金銅仏が造られたことは周知の通りである。この造像の方法には金・銀・銅・鉄・錫などをとかして型にはめこむ鑄造法と、銅板を裏からたたきだす打出彫りとかある。金属仏は奈良時代以前が多

く、多いことは注目されねばならない。しかし、この期の塑像はほとんどが人物の肖像である。塑像の造り方は、はじめ心木を造りそれを麻や藁の縄で巻き、その上に粘土をつけて原型をつくり、さらに精選した中土でぬり、その上に胡粉をぬって最後に色彩をほどこす。指先など細い部分は銅線で心をつくるのである。塑像は耐久性に欠けるが、石材や金属とちがって非常に柔らかい感じをあたえる。東大寺三月堂内の日光・月光・菩薩像などその典型ともいふべきであろう。また、傅といつて粘土で像をつくり素焼きにして瓦のようにしたものがあるが、これは奈良時代にかざられており、数もわずかである。

4 うるしのほけ(乾漆像)

中国には古くから存在していたが、日本では奈良時代以前のみで、それ以後には見られない。その製法は脱漆(だつせき)と木心乾漆(もくしんかんせき)の二つがある。脱漆といふのは塑像の原型を造り、その上に麻布を漆で何回もはって仕上げ、乾いた時の粘土を除く。木心乾漆は初め木で原型を彫りその上に麻布を漆で貼りつけて仕上げるのである。唐招提寺のかの有名な鑑真和尚像は脱乾

漆の例であるが、奈良の寺々には乾漆像が多く見うけられる。

5 木像

唐の玄奘が印度旅行から帰ったときその将来した仏像の中に梅檀(ばいだん)の木像が四体あったというから、すでに香木で仏像が造られていたことが知られる。日本では奈良朝までは木像はきわめて少ない。次の平安朝になると密教が伝来し山嶽(さんたく)仏教が盛んになると急に仏像の要求が高まってくる。ところが従来の金銅や漆は高価で入手が困難なため、いきおい日本に豊富な木材が造像の素材として用いられた。それは檜(ひのき)が一番多く、次に樺(かや)・樟(かや)・桂(けい)・梅(うめ)・桜(さくら)が用いられ、江戸期に入ると松・杉も使用された。木仏には一木造りと寄木造りがある。一木造りといつても全身が一本の木で造られるのはまれで、頭部と軀部のみ一材で彫り、他の手足や持物などは別材で造ってはめ込んだものも一般に一木造りといっている。寄木造りは巨大な像を造るときで像の各部を一材で造り、それを結合させて一像を完成するのである。

(参考書)「望月仏教大辞典」西村公明「仏像の再発見」など

(一頁つゞき)

私はむしろ百姓自身の祈りの中から盛り上がり、踊りつづけられてきたものと考えたい。古調郡上節は観光化された今の踊りとは大きなちがいがあつたと思われる。

昔の人は神をどのように理解してきたのだろうか。貞永式目の第一条に「神は人の敬するによつてその威を増し、人は神の徳によつて運を添う」とある。鎌倉武士は神は自らの中にありと感し取つていたのである。本来神といふのはそういうものである。

△以上は四月二日本会総会(村民センター)における講演の要旨である▽



松井京二

百年公園

二十億石の歴史に思ふかな吾れにも無量の歴史はありて

篠脇城址

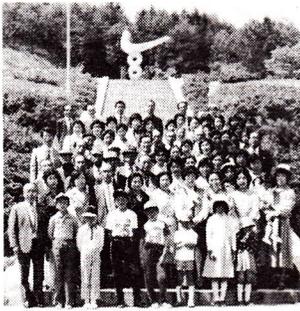
篠脇の館の礎石語りかく諸行無常や泡沫の身を

文化財現地

見学記

驚見鈴子

風薫ると言う文字通りさわやかな五月の風をバスの窓一杯に入れた関市の岐阜県博物館見学に行きました。博物館では正午迄二時間ほどゆっくりと見学することが出来ました。特別展の開催中であつたので「濃飛の先史時代―縄文土器の神秘」と言うテーマ通り数多くの土器や石器が展示されておりました。約一万年前から八千年も続いたと言われる縄文時代の草創期から晩期にいたるまで土器や石器の変化に伴い、歴史の推移を目のあたりに見る心地でした。むずかし



百年公園にて(岐阜県博物館前)

い事はわかりませんが、現在私達が当然のごとく使っている身の廻りの道具のほとんどが、原形は何千年も前の人々の考え出したものであることを知り縄文時代の人々の生活の知恵のすばらしさに目を見張るばかりでした。又、祭と信仰のところで感じたことですが、喜び事は神への感謝としてお祭をし、不安や畏れは祈りの心となり信仰となつたのでしよう。その信仰やお祭りは彼らの生活の一部となつていたのではないのでしょうか。その反面まだ用途のわからない石造物を眺めていると、何かを私たちに語りかけてくれるような神秘ささえ感じられました。別室には

動物物の化石が展示されていたが中でもかえでの葉が散つた姿そのままに折り重なり、葉脈の一本一本までがはつきりと残っているのは印象的でした。数千年もたった今も美しいシルエットを残している大自然の不思議さと偉大さが今さらのように感じられました。数多くの展示物の中でも、大和村の篠脇城の模型や小間見川のオオサンショウウオの生息状況の模型などが会場に花をそえていました。どの展示場でも郡上郡から出品さ

れた土器等の前に立つと、遠い旅先で知人に出会つたようななつかしさをおぼえました。午後は本堂、三重の塔、客殿まですべてが国指定重要文化財となつている新長谷寺へお参りしました。運よくお開帳の期間中であつたので、御院主様の詳しいご説明をお聞きして観音様を近くで拝ませてくださいました。また緑の木立の中に白壁の客殿がありました。広縁からどうだんの垣根越のお茶室や、新緑の葉がくれに眺める三重の塔などを心静かに拝見させていただきました。こんな近くにこんな立派なお寺があることを今まで知りませんでしたので、まるで京都へでも旅をしている様な思いで見学しました。次いで文化会館と善光寺へ回り無事全コースを終わることが出来ました。

今回は大和村婦人会文化部の学級生の皆様も一緒にしたのでにぎやかな楽しい一日でした。皆さんといっしょに人類の歴史をたどつたり、美しく優しい仏様を拝せていただく事ができ、久し振りに心を洗われる思いをしました。有意義な一日を過ごすことができましたことを喜んでおります。

村内の天然記念物

見学に参加して

黒岩きくゑ

八月五日縁あつて村内の天然記念物の見学にお供させていただきました。今日も暑くなると思ひながら村のバス二台で大間見川の澄みきつた流れにそい、こんな奥に思う高い所に白山神社があり、神殿と拝殿の間に大きな杉の大木がそびえ立っていました。樹高約五〇米、樹齢八〇〇年(推定)と聞き、この巨大な生き物にまず一驚すると共にその靈氣に心も身も引きしまる思いでした。小間見の大サンショウウオ、口大間見白山神社のトネリコの木などにおどろいたり感心したりしているうちに万場の南宮神社につきました。自分の氏神様でありながら、ふだんはあまり気付かずしていたこの大モミジがこのたび村指定の天然記念物になつたので、改めてその見ごとな枝ぶりに感心しました。

白山神社のケヤキが長良川をはさんで、さらさらと風にたわむれて

いるさまは何か大和の歴史でもお互いに語り合つていようでした。今はこの辺もやたらと家が建ち、川の両側は堤防になり、かつては渡舟場で月見草が群れ咲いて川面にうつつしていたのは遠い昔のようです。島の七代天神は神殿も拝殿もとても広く、ご神体は等身大の座像七体で火事にあい焦れているとか、一目おがませて頂きたかつたと心残りです。西川役場跡のエノキの大木を見て牧の明建神社に着いたのは丁度お昼頃でした。桜並木をはじめ亭々とご神木の立ち並ぶ中に、神苑は七日のお祭りをひかえ掃目も整然と清められておりました。

この祭りは、県の無形文化財に指定されています。祭りの全容を土松さんから話していただきました。午後からは、まず領家のモミジを見学、墓の台石を根が巻きこんで墓石は落ちていたとか。もう百年もすれば今見えている台石もすつかり見えなくなるのではないかと思ひ、自然の不思議ないたづらに驚きました。増田家のツツジ、細川家のヒイラギ、こんなになるまでには代々の方が一つ心でないの中々育たな

い。ヒイラギがこんな葉に刺がなくなり、丸長型になるには三百年以上はかかる」と田中先生のお話でした。「人間も年がよるほど角がとれたらいいのに」と見学者の中から聞こえていました。

口神路の白山神社の六本ヒノキを最後に帰路につきました。村に住みながら見るもの聞くもの初めてで、すばらしい一日であったことを感謝します。

村内文化財

見学の一端

河合 芳江

「燈台もと暗し」とはよく言ったもので、村の文化財にどんなものがあるか、私はあまり知らなかったが、文化財見学に参加して、この日（八月五日）は村内の天然記念物を見学して歩いた。

歴史をたどると、私達の祖先が神社を建立して神をまつり、木を植えてから幾星霜、激しい風雪に耐えて七百年（鎌倉時代）から八百年（平安末期）の樹齢を保ち、亭々として大空に枝をのびし、大地にたくましくしっかと根を張っている大樹の群像を眺めていると祖先が残してくれたこの偉大な遺産と自然の恵みに頭の下がる思いがする。これらの社叢の樹木は、有為転変の世相を黙々として眺めある時は戦火に逢い、又は旱魃にあえぎながら世の中の興亡を見つめてきたにちがいない。しかし現在は繁茂しているものもあれば樹体の一部が枯死しているものもある。

例えば、明建神社の桜並木は春になれば花のトンネルをつくり私達を楽しませてくれるが、そのひとつひとつを眺めると、もう少し何とかせねば……というあせりが湧いてくる。又、金剣神社のエノキは長良川に雄大な枝を延ばし、夏は涼しい木蔭をつくり冬は風雪を凌いで生き長らえてきたであろうが、悲しいかな二本の幹のうち一本は枯死して伐り取られ、哀れな姿をさらけ出している。奥大間見白山神社の大杉は樹齢八百年といわれているが枝の一本は枯死し保護対策も完全とはいえないし、口大間見白山神社のトネリコは二百五十年の樹齢を保っているが、その枝の一本は折れて、折れ口が杉が生えている。何とも痛ましい気がする。

中には、庭園愛好家の垂涎の的となるような増田家の四本のツツジもあって、幹の周囲が六十糎から九十糎以上もあり誠に見事なものである。又、細川家のヒイラギは樹令五百年を生きた古木で尖歯もなくなっている。それからもう一つ領家のモミジは森氏の墓所の傍にあって巨大な根幹は墓所の土

してかき抱くようにして聳えている。これらを眺めると私達の祖先が如何に大切に愛情をこめて育ててきたか、その苦心が脈々と波打っているようで、思わず感嘆の声が漏れた。

これらの文化財は、村民が総力を挙げて大切にし、村の宝と解るような施設と保護が望ましい。そして現代に生きる私達の生きざまを年輪にしっかと刻みつけ、次の世代にバトンタッチするよう、誰もが自身の務として文化遺産を守っていききたいものである。

七代天神の鳥居杉に思う

島崎 英二

私は、今まで七代天神のお宮さんは遠くから拝しただけで、神域に入ってお参りしたのは、今度が初めてだった。どこのお宮さんでも神域に入ると心のひきしまる感じですが、この七代天神の前に立ったときはなんとも言えない尊さに思わず手を合わせた。

昔は、この本殿が山の上にお祀りしてあったと言う。鳥居杉と名づけられた大杉が川を隔て立っているのを見ると、そこに鳥居があり長い参道があったことが思われこのお宮の神域が如何に広大なものであったかがうかがえる。

本殿前には狛犬は、神の實在を信じ、神を守護しようとする私たちの深い信仰の象徴であったと思われる。

当時は人口も少なかったであろうが、こうした広大な神域を設け神をお祀りしたと言うことは、古人が神を中心にして信仰に結ばれた地域社会を築き上げようとしたことを物語るものではないだろうか。何百年の風雪に耐えて、今に生きつづけているこの大杉に向っていると、昔の人々のささやきがかすかに聞こえてくるようである。本堂の御前で扉をおして神を拝していると、長い歴史の足跡が胸の奥深くにひびいてくるように思われる。

私は多くの文化財を通じて古代の人達の清らかな心に触れ、その生活文化を学び、物質本位の現代社会において、少しでも心の中に潤いを持ちたいと思う。



明建神社前にて

會員名簿

(順序不同)

(氏名) (役名) (電話番号)

氏名	役名	電話番号	氏名	役名	電話番号	氏名	役名	電話番号	氏名	役名	電話番号
山下 運平	顧問	二四〇六	池田 弘		二七九六	滝日 準一		二七〇五	野口 幸	副会長	二七〇六
国枝 貞雄		二二九三	清水 作衛		三〇八六	日置 貞一		二六六二	森藤 幸		
日置 照郎		二〇七二	小野江 選量		二七二六	田口 勇治		三九五〇	洞 口		
高橋 義一	常任理事	三九七二	山下 直美		三九三八	日置 元衛		三四一七	此島 広	顧問	二四八〇
高橋 明	理事	二四八八	小池 八重子		二三〇九	粥川 溜		三三八七	須甲 甚一		二六六七
田中 裕		二二〇〇	藤沢 五三郎		三一六	清水 定		二七一〇	堀 福田		
加藤 文蔵		二八〇二	日置 幸雄		二七七〇	栗 栗			堀 貞雄		二三三七
池田 憲三		二二八二	松井 隆		三五〇三	島崎 増造	監事	二二三六	山田 長次	理事	三六四八
畑中 定夫		二二六八	坪井 真澄		三九九〇	増田 洋子		四〇四一	山田 昌枝		三六四八
小池 久江	理事	二五七六	坪井 庄市		三五〇四	武田 信康		二二八四	森 教雄		二五五四
青木 卦二		二三九二	松井 直	理事	四〇八五	中山 周左門	理事	二七二八	山田 良		二七九一
畑中 澄子		三五〇七	古田 忠		四〇九〇	鷺見 豊夫		二七八八	山田 良一		三七二八
河合 俊次		二二四六	坪井 政雄		四〇九二	古 道			松井 京二		三五八二
河合 芳江		二二四六	井口 一男		四〇二〇	松井 弘雄	理事	二七九五	若山 清		二八一七
畑中 清子		三三五六	佐藤 秀夫		四〇〇一	細川 優		二八六一			
河合 恒		三三五八	畑中 浄園	副会長	二四四一	森 忠敬	理事	二〇八三			
佐藤 光一		三三〇一	畑中 真澄		二四四一	森 拾吉		二二四八			
大間見			石神 堯生		二四一三	和 田 月男		三四六三			
野田 直治	会長	二二八五	井俣 初枝		二七五八	山田 真人		二二一四			
日置 広雄		二二八五	寛 明代		二五三二	名 血 部					
野田 茂	理事	二二八五	稲葉 春吉		二五〇三	尾藤 由		三四三〇			
青木 新三		二四三六	森 助二		三五二八	有代 喜平		二二〇一			
村井 正蔵	監事	二二三三	黒岩 きくゑ		二四六〇	有代 信吾	理事	三七九一			
日置 繁		二二五四	桑田 和子		二四一九	有代 いせ	書記	三七九一			
大野 隆成		二二三〇	徳永		二四一九	森下 正則		三四一三			
			木島 観一	理事	二〇二三	下 広 茂一		三八九五			
			木島 洋女		二五九一	下 広 すゑの		三七九〇			
			土松 新逸	常任理事	二七三一	永谷 広		三七六七			
				會計							

岐阜県博物館にて
小池久江
それぞれに遺物は語るその昔
縄文人の知恵と祈りを
縄文の土器に伝わる先人の温
き灯の今日に息づく

社叢にて
土松新逸
遠き祖が植えたまいたる神森
の老杉は語るそこはかとなく
世の移り里の変わりを見下して
大杉は今日も夕陽に立てり

岐阜県指定天然

記念物（大和村分）

（昭和五四年六月一日付）

○明建神社の社叢

昭和五〇年二月二十五日付で、村の天然記念物に指定されていたが今回県の天然記念物に指定されたもので、八七三〇㎡の境内には、樹齢七〇〇年以上のスギ二本（一本は目通り周囲七m）のほか、スギ・ヒノキ・ケヤキ・サクラなど目通り周囲一m以上の大木が三〇本ほどあり、横大門と呼ばれる二・三〇mの桜並木は、篠脇城の馬場跡といわれており、毎年美しく開花し、昔から桜の名勝として人々に親しまれている。

○口神路白山神社の六本ヒノキ

この白山神社の社叢は、昨年一月二十五日付で、村の天然記念物に指定されたが、今回その中の一本この六本ヒノキが県の天然記念物に指定されたものである。樹齢五〇〇年以上、目通り周囲六・二m、樹高三三・三mあり、地上二・五m、樹高三三・三mあり、地上二・五

mのところから幹が九本にわかれていて、県下でもまれなヒノキの大木である。

○領家のモミジ

下栗巣の森氏（通称領家）の墓の上にあるこのモミジは、昨年一月二十五日付で、村の天然記念物に指定されたが、今回県の天然記念物に指定されたものである。樹齢四〇〇年以上、目通り周囲五・三m、樹高一五mのモミジとしては珍しい大木で、岐阜県でもモミジの天然記念物指定はこれが初めてであるとのことである。



有代喜平

幾とせを石抱きしめて紅葉映へ幾世代家宝と咲きしつゝじかな

有代信濁子

石わずか見せて古墳の秋の草冷え冷えと庫裡の広さや朴の花

下広す系乃

縹雲ゆつくり流れ慈水の墓縦堀に添いて芒の風となる

小池八重子

石抱きて領家の墓のみじかな盛りあがる根のこぶ濡れていほむしり

大和村内指定文化財件数

（昭和五四年九月一日現在）

国指定天然記念物	一
県指定史跡	一
県指定天然記念物	三
県指定重要文化財	三
県指定重要無形民俗文化財	一
村指定史跡	八
村指定天然記念物	一
村指定重要文化財	九

次号原稿募集

- 一、見学記 八〇〇字程度
 - 二、見学主材短歌 三〜五首
 - 三、俳句 三〜五句
- 原稿〆切 五五年二月一〇日
 発刊予定日 三月三十一日
 宛先 大和村文化財保護協会
 事務所（教育委員会）

文化財保護協会への

入会のご案内

◇大和村文化財保護協会が発足してから三年経ちました。会員はすでに一一四名に達しました。今後さらに多くの方々に会員となつていただいで、本会の発展を期してゆきたいと思ひます。

◇会員には

- 保護協会岐阜県本部発行の「濃飛の文化財」（年二回）と「文化財美濃と飛騨」をお届けします。
- 本会会報「文化財やまと」（年一回）をお届けします。
- 県本部主催の見学会・講演会研究会に参加できます。
- 本会主催の文化財の保護・見学の他の研究会・講演会・文化財めぐり等に参加できます。

◇会員になるには、年額一五〇〇円の会費をそえて、事務所（大和村教育委員会）または地区の理事へ申し込んで下さい。

編集後記

▽紫苑やコスモスが咲きみだれて秋の深まりを感じる頃となりました。会員の皆様には、それぞれの道に精進なさつておられることと存じます。会報もお約束どおり第三号を発行することができました。

▽巻頭には日置先生のお許しを得て、今春総会時における先生のご講演の要旨を掲載させていただきました。

▽見学記や、見学の折々に詠まれた短歌・俳句などいずれも当時の思い出を甦らせてくれます。また都合で参加できなかった会員の方にもよい参考になることと思ひます。せつかく寄せて下さつた原稿のうち、紙面の都合でその一部分をやむを得ずカットした所もありますが何とぞご了承下さい。

▽「文化の秋」といわれるように村内各地において色々の文化的行事が行われています。有形・無形をとわずこれらの文化財を後の世に伝えるのことが、私達がこの世に生をうけた一つの証しであるうかと思ひます。（畑中記）